

1月

### 【大宮盆栽村100周年に向けた研究ノート】 ③盆栽村の人々

今号では、最初に盆栽村に移り住んできた人びとについてみていきたいと思えます。

盆栽村の九霞園に残された「盆栽村住民名簿」(※1)によって、初期の住民についてうかがい知ることが出来ます。この資料には、大正14年(1925)から昭和3年(1928)までの移住者の名前や生年、家族構成などに加え、家屋建築の年月が記されています。昭和初期に記されたとみられるこの資料をおもに参照し、大正14年・15年の移住者の状況について示したのが左表です。

第一号住人となったのは、移転事業をけん引した駒込の盆栽園・清水利太郎です。11月号でみたように清大園の土地の賃貸借契約は大正14年7月に締結されているため、契約手続きと道路・区画整備、各園の家屋の建築が同時進行で進んでいた様子がうかがえます。各園の建物は、利太郎の知人を介して来村した大工職の日下部氏が一挙に手がけました。

盆栽園は、東京市本郷区駒込(現文京

区)やこれに隣接する滝野川町(現北区)から移転してきていることがわかります。台地と低地による変化に富んだ地形を持つ駒込、染井、巢鴨、滝野川一帯には、江戸時代から多くの植木屋が集まっております。都市近郊の遊楽地としての役割も果たしていました。清大園と薫風園は、明治前半には駒込の団子坂で流行した菊人形の興行に携わっていました。明治10年代半ばから20年代には盆栽専門に移行し(※2)、業界の組織化や専門雑誌の創刊に関わるなど、当時の盆栽界をけん引する存在になっていました。また、万年青や水蓮、皐月などの園芸植物を商う植木屋も、盆栽村への移転を契機に盆栽専門に移行したとみられます。「盆栽村」の名称は、大正13年の資料(※3)にはすでに登場しており、入村する人々は、当時流行していた「盆栽」に未来を託して移転してきたと言えるのではないのでしょうか。

翌大正15年からは、盆栽愛好家も続々と入村しています。経済的に豊かな素封

家が多く、都内の本宅とは別に盆栽村に別荘を構える人が多かったようです。なかには趣味が高じて盆栽園を開園する者もいました。さらに、昭和4年の北総鉄道・大宮公園駅開業以降は、緑豊かな環境を求め、愛好家以外の人々も村に居を求めました。盆栽園以外の住人については、また折を見て紹介していきたいと思えます。

さて、移転してきた盆栽園の出自を考えると、開村当時の盆栽村が目指していた姿が自ずと浮かび上がってきます。東京の近代化による市街地の拡大により、緑豊かな郊外で庭や圃場を開放し、人々の遊興に供する江戸時代以来の園芸業者の伝統は、維持が難しくなっていました。関東大震災を契機とし、原野の広がる大宮の地に新天地を求めた人々は、江戸における植木文化の伝統を盆栽村に復興しようとしたのかもしれませんが。

なお、盆栽村の開発は当初、清水利太郎が結成した「大日本盆栽奨励会」の事業として位置付けられていたようです。

建築年月	園名	移転前の業種	名前	旧住所・備考	
1925年	3月	清大園	菊人形→盆栽	清水利太郎	駒込千駄木町
	5月	薫風園	菊人形 →盆栽・山野草	蔵石篤夫	駒込坂下町 昭和9年に栃木県佐野に移転
	6月	好石園	石・水石	米津梅次郎	愛知県名古屋
	7月	—	建築請負	日下部金一郎	浅草 後に金古園を開園
	8月	蔓青園	蘭・万年青	加藤留吉	駒込神明町
	11月	古松園	皐月	石田新次郎	滝野川町字西ヶ原か?
	12月	農園 (内海華園)	植木・水蓮	内海長太郎	駒込神明町
	12月	—	愛好家	新井四郎吉	神田錦町、製本業
1926年	7月	道三楽	愛好家	西村勝蔵	駒込神明町、証券業
	7月	—	愛好家	宮谷直方	昭和2年に半仙園を開園
	8月	—	愛好家	伏瀬谷源治 (伏屋源次郎)	神田旅籠町、旅客業 昭和2年に北洞荘を開園
	9月	—	愛好家	熊ヶ谷孝章	
	10月	—	植木	中村五三郎	昭和2年に寛楽園を開園
	12月	—	愛好家	古澤源太郎	昭和2年に春草庵を開園
	12月	—	愛好家	中村豊吉	
	12月	—	愛好家	薄田嘉吉	

※移転前の業種や旧住所は、『盆栽』(大日本盆栽奨励会)掲載の広告欄、『盆栽大事典』(同朋舎)、東京市の「地籍台帳」などによって確認した。

同会が発行する雑誌『盆栽』の5巻4号(大正14年)には、同誌編集者の小林憲雄による「盆栽村について」の一文が掲載されています。この記事には「今回奨励会に於て経営する盆栽村は其規模頗る大きく…(中略)…又遊楽園としての諸設備を整へ、一大楽園とするのであるから都人士一日の行楽場として、社会公共のための(ママ)事業とも云ひ得ると思われます」と記され、日帰り可能な「都会近郊遊楽地」としての盆栽村の役割が期待されています。住む人だけでなく、訪れる人々を楽しませる都会のオアシスを目指す計画が、移転事業の根幹にあったことがここにも示され、明治末期には東京近郊の行楽地として名の知られていた氷川公園(現大宮公園)に隣接する立地が、重要な意味を持っていたと思われる。

(大宮盆栽美術館 主査 菅原千華)

※1この資料は複写「J」(ピー)で、原本は現存していない。原題は無いが、林進一郎「第5章 盆栽村の成立」『さいたま市史 鉄道編』を参照して仮題を付けた。

※2平野恵「明治年間における有名植木屋の系譜 後編」『園芸世界 第32巻第5号』2012年

※3大正13年(1924)12月2日「大宮に盆栽村 四季の遊び場所」『東京毎日新聞』